

No.36 チャールズ・ウォーゼン 「水瓶」

Charles Worthen

北川フラムさんのコラム / 1995 (平成7) 年 12月 1日付 立川市市報記事より

ファーレ立川のなかで、何の変哲もない作品といえば街の4か所に置かれているチャールズ・ウォーゼンの緑色の水瓶だろう。この蓋をちょっと動かせば、その中に散水栓が見える。これは水道のカバーの機能を果たしている。

都市はとても便利にできているが、ひとたび事故があれば、水道が止まり、電気が切れ、ガスが止まる。この時の悲惨さは例えようもない。都市に必要なそういうエネルギーの大切さをチャールズ・ウォーゼンは呼び起こしてくれる。

この形は水の無い砂漠で使われている水瓶からとっている。彼の地の人たちの生活とつながる、それでいて日ごろ忘れていたことをこの作品は教えてくれる。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現:UR都市機構) 「ミニ通信」より

立川の計画を構成する11棟のビルとビルの間およびその周辺には、芝生が敷いてある場所や小さな木や低木があります。私はこうした緑のある場所に水を撒く散水栓の為の囲いを作るように委託されました。

これら緑のある場所 (6月に現場を訪れた時にはまだ存在していませんでしたが) は、“自然”の特性を備えているにもかかわらず、現場をいっぱいにしていくビルや美術作品と同様、人間の技術によって作り上げられたものです。

この緑の人工の肌は、この街が存在する前にあった自然の風景を人々に思い起こさせるためのシンボルです。地下水道が発明される以前、人々は水を井戸から引き上げ、それぞれの家まで持ち運んでいました。自然界のシンボルである緑の機能にあわせるために、私は、水を運ぶための器に似た作品を創ることにしました。

もし都市の住民が、失われた世界の象徴であるこの緑の場所に感応するならば、彼らはまた一象徴的な意味で水を運ぶ—これらの器が、それと等しく遠い時代の人工物であることを発見するでしょう。